

## 現代日本語における「話題主」と「聞き手」の上下関係が話し手の敬語表現に及ぼす影響

著者	鄭 惠卿
雑誌名	日本語と日本文学
巻	11
ページ	L9-L28
発行年	1989-06-30
URL	<a href="http://doi.org/10.15068/00161983">http://doi.org/10.15068/00161983</a>

# 現代日本語における「話題主」と「聞き手」の 上下関係が話し手の敬語表現に及ぼす影響

鄭 惠 卿

## 1. はじめに

現代日本語の敬語は、その用法の性質からしてタブーの時代、絶対敬語の時代を経て今や相対敬語の時代に入っているとされている。これは、金田一京助(1942)の敬語の発達段階説によるものであるが、井上史雄(1981)はさらに「日本語の敬語は、絶対敬語―相対敬語の段階を通して、今や敬語の用法全体が対者敬語化しつつある」(注1)という見解を示している。この対者敬語化の傾向は、渡辺実(1970)、大石初太郎(1983)等によって指摘されている現代日本語の敬語法の「聞き手中心性」(注2)という性質と大いに関係があるように思われる。

敬語の発達に関してはもうひとり三上 章(1970)が、「敬語法の敬意は「相手に経始する」一方に話し手本位の敬語法も事実として存在するが、成長の方向は話し手本位から相手本位へであってその逆ではない」(注3)と述べており、基本的には金田一氏の敬語の発達段階説に沿っていると思われるが、敬語の発達を、「成長の方向は話し手本位から相手本位へ」(傍点、筆者)と説明しているところは興味深い。なぜならば、「話し手本位から相手本位へ」というこの敬語発達の一側面は歴史的発達、変化だけではなく一個人の言語習得上の「敬語の発達」という側面からしても同様のことが言えそうだからである。よく日本語の敬語の習得はかなり遅く、完全に使いこなせるようになるのは学校(大学)卒業以降ともいわれるくらい、母国語の話者にとっても敬語の習得にはかなりの時間を要する。これは子供の時の「話し手本位」の敬語使用が「相手本位」の敬語使用へと発達、転移されていくために必要な時間が長くなるからであると考えられる。芳賀(1979)は敬語の発達と関連してピアジューの思考発達の理論における「視点の統合」に関わる「脱中心化」や「可逆性」のような働きが敬語の発達の側面においても関わりがあるのではないかということを指摘している(注4)。子供の「話し手本位」の敬語使用から大人の「相手本位」の敬語使用へと発達するためには、まさに視点の「脱中心化」と「可逆性」というのは必要不可欠のように思われる。それにもう一つ敬語の発達には「社会化」の過程も重要であろう。

以上で敬語の発達について若干述べてみたが、いわゆる絶対敬語と相対敬語と呼ばれているものは「話題の人物」について言及する場合の敬語使用にその差が最もよく現れるとされている。すなわち絶対敬語とは、話し相手に関係なく話題の人が自分(話し手)より目上であるかどうかということに基づいて話し手本位に敬語が用いられるものであるが、

相対敬語とは話しの相手によって話題の人物への敬語使用が異なってくる相手本位の敬語を用いるものであるといわれている。このような相対敬語と関連して渡辺実<sup>5</sup>は、現代敬語法の特徴である「聞き手への配慮が話題の人物への敬語の使い方を、きわめて強く制約するものである」(注<sup>5</sup>)とし、話題の人物に対する敬語は、聞き手に対して失礼にあたる場合にはさしひかえられると述べている。さらに井上史雄は「第三者への敬語は相手への敬意を表わすために用いられている」(注<sup>6</sup>)とし、現代の敬語法における聞き手中心性が話題性に対する敬語使用に及ぼす影響の新たな側面を指摘している。このような指摘と関連し荻野綱男は、第三者に対する敬語使用にはいろいろなファクターが関係しているが、中でも聞き手に対する配慮が一番関係しておりその次に第三者に対する配慮が関係しているということを数量的に確かめている(注<sup>7</sup>)。

本研究は、以上のような現代の敬語法における話題の人物「話題主」(本研究では、話し手、当の聞き手、わきの聞き手を除いた目に見えない第三者が話題にのぼる場合を「話題主」と呼ぶことにする)に対する敬語使用には、聞き手が関わっているということを踏まえた上で、話題主と聞き手との関係が、話し手の「話題主」、「聞き手」それぞれに対して用いた敬語表現の上にどのように現れるのかを、その用いられた敬語表現の種類と使用程度の分析を通して考察することにする。

## 2. 研究目的

本研究は、大きく分けて現代日本語の敬語表現について次の二つのことを明らかにするのを目的とする。

第一、日常の会話場面において聞き手における上下関係が話し手の話題主の取り扱いすなわち、話題主に対する敬語使用にどのように、どの程度関与しているのか。

第二に、聞き手に対する話し手の敬語使用には話題主における上下関係が関与しているのかどうか、もし関与しているとすればどのように、どの程度関与しているのか。

という二点を話し手によって用いられた敬語表現の質的、量的分析を通じて明らかにすることを目的とする。

## 3. 研究方法

本研究では、話題主と聞き手の相互影響を明らかにするために話し手(「大学生」という地位の上下関係の一レベル)、話題主(学長、B教授、助手、院生の先輩、同級生、後輩の六レベル)、聞き手(A教授、院生の先輩、同級生、後輩の四レベル)という三者間の上下関係を図1のように想定し、全部で1(話し手のレベル)×6(話題主のレベル)×4(聞き手のレベル)=24の質問項目からなる質問紙による調査を行ない、その資料を分析する方法をとった。次の図1は、大学生である話し手、6種の話題主と、聞き手が指導教官であるA教授の場合の上下関係の組み合わせだけを示したもので、外の三種類の聞き手の場合の組み合わせは紙面の制約上省略した。

質問項目は、図1で示したような話し手・話題主・聞き手の三者間の上下関係に基づき次のように作成した。

話し手		話題主		聞き手
		目上		目上
大学生	→	学長	←	A教授
		目上		目下
大学生	→	院生	←	A教授
		目上		目下
大学生	→	助手	←	A教授
		目上		同じ
大学生	→	B教授	←	A教授
		同じ		目下
大学生	→	同級生	←	A教授
		目下		目下
大学生	→	後輩	←	A教授
		⋮		
		以下省略		

図 1 話し手・話題主・聞き手の三者間の上下関係

会話場面：場面は大学生活においてみかけられるものにし、「〇〇が〇〇学会誌（学校新聞）に論文（そのこと）を書いたが、あなたは知っているか」ということを尋ねる内容の話しの場合にした。

話し手：話し手は大学生にし、被験者自身を話し手として想定させた。

聞き手：聞き手は大学生が学校生活のなかで接する人々で上下関係を考慮し、指導教官であるA教授、院生の先輩、同級生、後輩という4種類の地位の上下関係が異なる聞き手を立てた。

話題主：話題主は話し手、聞き手との三者間の上下関係の考慮から学長、B教授、助学院性の先輩、同級生、後輩の6種類の地位の異なる上下関係の異なる話題主を立てた。

以上のように聞き手のレベル4×話題主のレベル6＝計24の質問を作成した。質問紙は附録1に示してある。

調査は、1987年5月26日筑波大学で国語の授業時間に集団調査の形で試行した。調査の対象は、筑波大学医学専門学類の大学生46名（男子26名、女子20名）である。

なお、敬語使用を制約する要因としては様々なものがあげられるだろうが、国立国語研究所のある調査によると「話し相手の地位・年齢・親疎によって敬語の使われる割合が左右される」という報告がなされている（注8）。日本語の敬語使用を規定する要因に関しては、かつてマーティン（Martin, 1964）が現代日本語と韓国語、沖縄首里方言を対象に、聞き手に対する場合と話題主に対する場合とに分け小規模ながらの調査報告を行なっている（注9）。この調査でも同じく地位、年齢、親疎（うちそと）に加え性別があげられているが、これらの条件は敬語使用を規定する諸要因のなかでもとりわけ影響力の強いものと見ていいだろう。本研究では、聞き手中心性により対象敬語化が進んでいるといわれる現

代行会においては敬語使用を規定する要因としてマーティン氏の調査で取り上げている 4 の要因がそれぞれどのように意識されているのかを、1) 聞き手に関する場合、2) 話題主に関する場合、3) 話し手、話題主、聞き手三者間の関係に関する場合に分けてそれぞれについてアンケート調査を前記の質問紙で同時に行なった。このアンケート調査によって質問紙による敬語使用の結果と被験者の「敬語意識」との関係も照らし合わせてみることで、両方の相互関係も明らかにすることができるだろう。

#### 4. 調査結果と解釈

質問紙による敬語使用の調査の結果、話し手・話題主・聞き手における三者間の上下関係の組合せによる 24 の質問項目  $24 \times 46$  人 = 合計 1,104 の敬語表現の文が得られた。そしてなお質問紙で同時に行なわれた敬語意識に関する三つのアンケート調査項目に対しても 46 人の男女大学生の答えが得られた。それでは次にまず敬語表現の分析結果を見てみたい。

##### 4.1 話題主に対する敬語使用

今回の質問紙による敬語使用の調査は、話し手と聞き手そして話題主の上下関係が話し手の話題主、聞き手それぞれに対する敬語使用にどのような影響を及ぼすのかを明らかにしようとするものである。そのため、一つの敬語表現の文の中に例えば「〇〇が〇〇学会誌に論文を書いているが、知っているか」のように「話題主」と「聞き手」それぞれに対する敬語が同時に表れる敬語表現を求めている。それではまず聞き手の上下関係によって話題主に対する敬語使用の程度はどのようになっており、またそれぞれの話題主にはどのような敬語表現が用いられているのかを見てみよう。

表 1 は、話題主に対する敬語表現として文の従属節において述部部分に用いられている敬語表現形式の種類とその使用傾向を頻度と％で表わしたものである。

敬語研究において、敬語が用いられている場合と用いられていない場合をどのような用語で呼ぶかは研究者によって様々であるが(注10)本研究では、一つの会話文の中である敬語表現形式が用いられている場合を待遇の観点からして+待遇、中立的(ニュートラル)ないわゆる常語を用いている場合を±待遇、下待語を用いた場合を-待遇と呼ぶことにする。表 1 は、今回の調査において話題主に対して用いられた敬語表現形式を全部挙げたものでこれらの表現を用いたものを合わせて+待遇として示し、これら以外の動詞の原形やあるいは動詞の代わりに形式名詞「の」「こと」等の形式を用いたものを合わせて±待遇とし、全体の敬語使用の傾向を表わしている。

本研究で設定した六レベルの話題主それぞれに対する敬語使用を表 1 から見ると、同じ話題主であっても聞き手の地位が異なるとそれに対する敬語使用の様相が異なっていることが分かる。すなわち、同じ話題主であっても聞き手が上位になるにつれ話題主自体に対する+待遇の程度も高くなっているのである。この傾向は特に聞き手側に属するかあるいは聞き手側により近いと思われる話題主に対する場合においてその傾向が強い。また、聞き手が同級生の場合より後輩の場合において話題主に対する+待遇の程度が高いが、これも聞き手が後輩の場合が同級生の場合より話題主はもっと上位になるという「聞き手中心

性」によるものであろう。以上のような結果から話題主に対する話し手の敬語使用に聞き手の及ぼす影響が分かったが、さらに、聞き手と同等あるいは下位に当たる話題主に対してまでも+待遇の程度が高くなるという傾向も見られる。表1に見るように聞き手がA教授の場合、A教授より下位である話題主「後輩」「同級生」をはじめ「院生」「助手」に対して+待遇をしているのがそれである。このような敬語使用は、三上 章(1953)の「敬語法のA線」すなわち「話題主を上位として待遇する(話題主に対して敬語を用いる)のは、聞き手より話題主が上位である場合」というような従来の敬語法において規範とされている法則に反するものであるだけでなく、さらに前記の渡辺実(1971)の「話題の人物に対する敬語は、聞き手に対して失礼に当たる場合にはさしひかえられる」という指摘とも異なるものである。このような敬語使用は、現代日本語の敬語法における「聞き手中心性」という性質の影響がより強くなったものであると考えられる。聞き手が上位である、あるいは聞き手側に属するまたはより聞き手側に近い、聞き手と話し手の関係が「うちそと」のどちらかであるかなど、「聞き手」の属性によって「話題主」に対する待遇がなされていることは現代の敬語法における「聞き手中心性」を物語るものであるといえよう。聞き手のこのような属性につれられ聞き手より下位である話題主に対してまで敬語が用いられるような敬語の用法を井上史雄は「敬語の丁寧語的用法」「敬語法全体の対者敬語化」(注11)などと呼んでいるが、筆者は現代におけるこのような日本語の敬語の用法を「言語美的機能」への拡大、変化とみている(注12)。

表1に表わされている被験者全体の6種類の話題主それぞれに対する+待遇の程度をグラフに表わすと次のグラフ1のようになり、4種類の聞き手の上下関係による6種類の話題主それぞれに対する+待遇の程度の変化が一目に分かる。

グラフ2は、6レベルの話題主それぞれに対する敬語表現の中でもっとも多く用いられている「～れる」「～ておられる」「～ていらっしゃる」「お～になる」の使用の様相を男女別に表わしたものである。

話題主に対する敬語表現の特徴は、男子大学生の方は「～れる」「～ておられる」を比較的上位の話題主に対して多く用いている反面、女子大学生の方は「～ていらっしゃる」「お～になる」を多く用いていることである。また、男子の場合は上下関係の微妙な差に応じて+待遇の程度がはっきりと異なっているのに対して女子の場合はその+待遇の程度の差が小さい。男子の方が女子より敬語使用においてより相対化した使い方をしているのが本研究において明らかになった。このことは、男女とも聞き手が同級生の場合より後輩の場面においてが話題主に対して+待遇をしている程度が高いが、この場合においても男女の差が顕著であることから分かることである。聞き手の上下関係が話題主に対する+待遇の程度に段階的に影響を及ぼしているということは明らかである。

#### 4.2 聞き手に対する敬語使用

先に聞き手の上下関係が話題主に対する敬語使用にどのような影響を及ぼすのかを話題主に対して用いられた敬語表現を中心に考察してみた。今度は、話題主が聞き手の待遇に影響を及ぼしているかどうかを探ってみたい。本研究では後輩、同級生、院生の先輩、指導教官のA教授という4レベルの聞き手を想定したが、これらはある程度上下関係がはっ

表1 話 題 主 に 対 す る

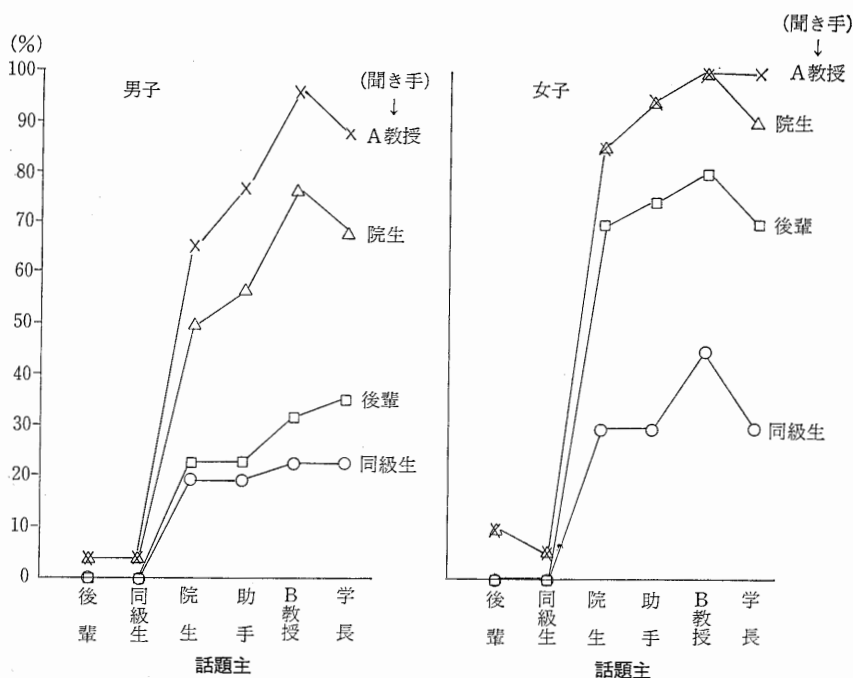
敬語現 表形式	話し手		男 子 人 人 (%)*						男 子 人 人 (%)					
	聞き手													
	話題主		後 輩						同 級 生					
	後輩	同級生	院生	助手	B教授	学長			後輩	同級生	院生	助手	B教授	学長
～れる			3 (11.5) 7 (35.0)	2 (7.7) 5 (35.0)	2 (7.7) 5 (25.0)	2 (7.7) 3 (25.0)					2 (7.7) 2 (10.0)	2 (7.7) 2 (10.0)	3 (11.5) 4 (20.0)	2 (7.7) 1 (5.0)
～てみえる			1 (3.8)	1 (3.8)	1 (3.8)	1 (3.8)					1 (3.8)	1 (3.8)	1 (3.8)	1 (3.8)
～ておる														
～ておられる			1 (3.8)	2 (7.7)	2 (7.7)	3 (11.5) 1 (5.0)					1 (3.8) 1	1 (3.8) 1	2 (7.7) 2 (5.0)	2 (7.7) 2 (5.0)
～ていらっし やる			6 (30.0)	7 (35.0)	2 (7.7) 6 (30.0)	2 (7.7) 6 (30.0)					2 (10.0)	3 (15.0)	3 (15.0)	3 (15.0)
お～になる			1 (3.8) 1 (5.0)	1 (3.8) 2 (10.0)	4 (20.0)	3 (15.0)					1 (3.8) 2 (10.0)	1 (3.8) 1 (5.0)	1 (3.8) 1 (5.0)	1 (3.8) 1 (5.0)
お～になられ る					1 (5.0)									
お～になって みえる														
お～になって おられる														
お～になって いらっし やる					1 (3.8)	1 (3.8)								
～なさる														
～なされる														
+待 遇			6 (23.0) 14 (70.0)	6 (23.0) 15 (75.0)	8 (30.7) 16 (80.0)	9 (34.5) 14 (70.0)					5 (19.2) 6 (30.0)	5 (19.2) 6 (30.0)	6 (23.0) 9 (45.0)	6 (23.0) 6 (30.0)
±待 遇	26 (100) 20 (100)	26 (100) 20 (100)	20 (76.9) 6 (30.0)	20 (76.9) 5 (25.0)	18 (69.2) 4 (20.0)	17 (65.4) 6 (30.0)	26 (100) 20 (100)	26 (100) 20 (100)	21 (80.8) 14 (70.0)	21 (80.8) 14 (70.0)	20 (76.9) 11 (55.0)	20 (76.9) 14 (70.0)	20 (76.9) 14 (70.0)	20 (76.9) 14 (70.0)

\* 表中上の数字は男子学生、下の数字は女子学生の場合を示す。( )内は%。

## 敬語使用の傾向

男子 人 (%) 女子 人 (%)						男子 人 (%) 女子 人 (%)					
院 生						A 教 授					
後 輩	同級生	院 生	助 手	B教授	学 長	後 輩	同級生	院 生	助 手	B教授	学 長
		6 (23.1)	5 (19.2)	4 (15.4)	3 (11.5)			7 (26.9)	7 (26.9)	7 (26.9)	4 (15.4)
		4 (20.0)	4 (20.0)	3 (15.0)	3 (15.0)			6 (30.0)	6 (30.0)	3 (15.0)	4 (20.0)
		1 (3.8)	1 (3.8)		1 (3.8)			1 (3.8)	1 (3.8)		
1 (3.8)	1 (3.8)			2 (10.0)		1 (3.8)	1 (3.8)		3 (11.5)	4 (15.4)	2 (10.0)
		2 (7.7)	2 (7.7)	5 (19.2)	4 (15.4)			3 (11.5)			4 (15.4)
		1 (5.0)	2 (10.0)		2 (10.0)			2 (10.0)		1 (5.0)	
		1 (3.8)	2 (7.7)	4 (15.4)	5 (19.2)			2 (7.7)	2 (7.7)	5 (19.2)	4 (15.4)
		7 (35.0)	7 (35.0)	5 (25.0)	6 (30.0)			5 (25.0)	8 (40.0)	6 (30.0)	4 (20.0)
		2 (7.7)		4 (15.4)	2 (7.7)			4 (15.4)	7 (26.9)	7 (26.9)	7 (26.9)
		4 (20.0)	5 (25.0)	5 (25.0)	3 (15.0)			4 (20.0)	4 (20.0)	8 (40.0)	8 (40.0)
		1 (5.0)	1 (5.0)	3 (15.0)	3 (15.0)					1 (3.8)	1 (3.8)
				1 (3.8)	1 (5.0)					2 (10.0)	2 (10.0)
										1 (3.8)	1 (3.8)
				1 (5.0)							
				1 (3.8)	1 (3.8)						
				1 (3.8)	1 (5.0)						
				1 (3.8)							
				1 (3.8)	2 (7.7)						2 (7.7)
1 (3.8)	1 (3.8)	13 (50.0)	15 (57.7)	20 (76.8)	18 (69.2)	1 (3.8)	1 (3.8)	17 (65.3)	20 (76.8)	25 (96.2)	23 (88.4)
		17 (85.0)	19 (95.0)	20 (100)	18 (90.0)	2 (10.0)	1 (5.0)	17 (85.0)	18 (95.0)	20 (100)	20 (100)
25 (96.2)	25 (96.2)	13 (50.2)	11 (40.3)	6 (23.1)	8 (30.9)	25 (96.2)	25 (96.2)	9 (34.6)	6 (23.1)	1 (3.8)	3 (11.5)
20 (100)	20 (100)	3 (15.0)	1 (5.0)	0 (0)	2 (10.0)	18 (90.0)	19 (95.0)	3 (15.0)	1 (5.0)	0 (0)	0 (0)





グラフ 1 聞き手による話題主への敬語使用の程度

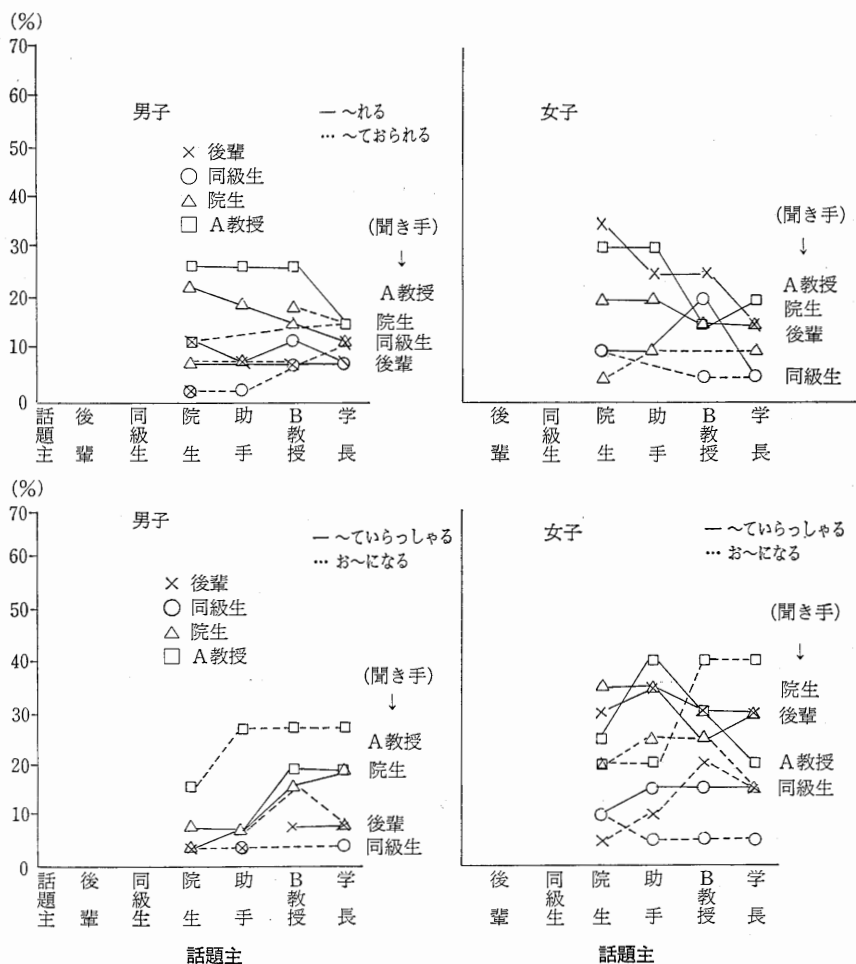
きりとしているためそれぞれの聞き手に対して異なった敬語表現が用いられるだろうということは予想される。しかし、どの聞き手にどのような敬語表現をどの程度用いるかということは本研究のような調査を通じて調べてみないとなかなかその様相が分かりにくい。次の表 2 は、6 レベルの話題主それぞれの場合に 4 レベルの聞き手に対して用いられた敬語表現すべてを数値で表わしたもので、聞き手に対応した敬語表現の使用分布が分かる。

表 2 に表れている聞き手に対する敬語使用の最も大きな特徴は次のようにまとめることができる。

第 1、聞き手への待遇には話題主はほとんど影響を及ぼさないようである。それは、話題主別の聞き手への敬語使用にほとんど変化がないことから分かる。

第 2、聞き手が院生と A 教授のそれぞれの場合に対する + 待遇の程度は量的には差はほとんどないものの用いられている敬語表現の形式の面すなわち質的な面においてははっきりとした待遇の差が見られた。

表 2 で見るように 4 レベルの聞き手それぞれに対する敬語使用は、聞き手の上下関係によって用いられる敬語表現がはっきりと分かれている。また、聞き手に対する + 待遇の程度を話題主の上下関係と対応させてみた場合、先の話題主に対する敬語使用の場合は 4 レ



グラフ 2 話題主に対する敬語表現の使用傾向

ベルの聞き手それぞれによって同じ話題主であってもその話題主に対する+待遇の程度が非常に微妙に変化した。聞き手に対する敬語使用には話題主の影響はほとんど見られない。これは、聞き手中心性の強い相対敬語においては聞き手に対する敬語使用は話題主など他との関係よりまず聞き手それ自体の持つ属性によって決まるとことを示しているように思われる。

第3に、聞き手に対する敬語使用においても女子の方は同級生より後輩に対してが+待遇の程度が高い。このような敬語使用の傾向は話題主に対する敬語使用においても見られたが、男女差の一つである。男女差は用いる敬語表現の種類の違いにも表れている。話題

表 2 話題主による聞き手に対する敬語使用の傾向 (1)

表現形式	話題主 聞き手		話題主 話し手		後 輩		同 級 生		院 生		助 手		B 教授		学 長	
	後 輩															
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女		
知ってる	13 (50.0)	1 (5.0)	12 (46.2)	14 (70.0)	11 (42.3)	14 (70.0)	12 (46.2)	14 (70.0)	12 (46.2)	13 (65.0)	12 (46.2)	11 (55.0)				
知ってるか	11 (42.3)		11 (42.3)		13 (43.4)		11 (42.3)		12 (46.2)		12 (46.2)					
知ってるかい	2 (7.7)		3 (11.5)		2 (7.7)		2 (7.7)		2 (7.7)		2 (7.7)		1 (3.8)			
知ってるかな		1 (5.0)		1 (5.0)		1 (5.0)	1 (3.8)	1 (5.0)		1 (5.0)			2 (10.0)			
知っててよね													1 (5.0)			
知ってただろう		1 (5.0)														
知ってたでしょう		1 (5.0)						1 (5.0)		1 (5.0)		1 (5.0)				
知ってます		1 (5.0)								1 (5.0)		1 (5.0)				
知ってますか		4 (20.0)		4 (20.0)		4 (20.0)		4 (20.0)		4 (20.0)		1 (3.8)	3 (15.0)			
知っておられますか																
知っておられる でしょうか																
知っていらっし ゃいますか																
知らない						1 (5.0)										
知りませんか																
知りませんでしたか																
知り申しあげて ますか													1 (5.0)			
お知り申しあげ てますか																
ご存知ですか																
ご存知でしょ うか																
ご存知ないで すか																
ご~されて ますか																
お~になり ました でしょ うか																
どうですか																
いかがで しょう か																
省 略		1 (5.0)		1 (5.0)												
+ 待 遇		6 (30.0)		4 (20.0)		4 (20.0)		5 (25.0)		6 (30.0)		1 (3.8)	6 (30.0)			
士 待 遇	26 (100)	14 (70.0)	26 (100)	16 (80.0)	26 (100)	16 (80.0)	26 (100)	15 (75.0)	26 (100)	14 (70.0)	25 (96.3)	14 (70.0)				
計 (%)	20 (100)	20 (100)	26 (100)	20 (100)	26 (100)	20 (100)	26 (100)	20 (100)	26 (100)	26 (100)	20 (100)	26 (100)	20 (100)	26 (100)	20 (100)	

話題主による聞き手に対する敬語使用の傾向（２）

表現形式	話題主		後 輩		同級生		院 生		助 手		B教授		学 長	
	聞き手	話し手	同 級 生											
			男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
知ってる	15 (57.7)	17 (85.0)	15 (57.7)	17 (85.0)	14 (53.8)	18 (90.0)	16 (61.5)	17 (85.0)	15 (57.7)	18 (90.0)	15 (57.7)	17 (85.0)		
知ってるか	9 (34.6)		10 (38.5)	1 (5.0)	10 (38.5)		10 (38.5)	1 (5.0)	9 (34.6)			9 (34.6)		
知ってるかい	1 (3.8)		1 (3.8)		2 (7.7)				2 (7.7)			2 (7.7)		
知ってるかな	1 (5.0)													
知ってたよね		1 (5.0)		1 (5.0)				1 (5.0)						
知ってただろう														
知ってたでしょう														
知ってます														
知ってますか		1 (5.0)		1 (5.0)		1 (5.0)		1 (5.0)		1 (5.0)		1 (5.0)		1 (5.0)
知っておられますか														
知っておられるでしょうか														
知っていらっしゃいますか														
知らない														
知りませんか														
知りませんでしたか														
知り申しあげてますか														
お知り申しあげてますか														
ご存知ですか														
ご存知でしょうか														
ご存知ないですか														
ご～されてますか														
お～になりましたでしょうか														
どうですか														
いかがでしょうか														
省 略	1 (3.8)					1 (5.0)				1 (5.0)		2 (10.0)		
＋ 待 遇		1 (5.0)		1 (5.0)		1 (5.0)		1 (5.0)		1 (5.0)		1 (5.0)		1 (5.0)
士 待 遇	26 (100)	19 (95.0)	26 (100)	19 (95.0)	26 (100)	19 (95.0)	26 (100)	19 (95.0)	26 (100)	19 (95.0)	26 (100)	19 (95.0)	26 (100)	19 (95.0)
計 (%)	26 (100)	20 (100)	26 (100)	20 (100)	26 (100)	20 (100)	26 (100)	20 (100)	26 (100)	20 (100)	26 (100)	20 (100)	26 (100)	20 (100)

話題主による聞き手に対する敬語使用の傾向（３）

表現形式	話題主											
	後 輩		同 級 生		院 生		助 手		B教授		学 長	
	A 教 授											
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
知ってる												
知ってるか												
知ってるかい												
知ってるかな												
知っててたよね												
知ってただろう												
知ってたでしょう												
知ってます												
知ってますか	12 (46.2)	4 (20.0)	13 (50.0)	5 (25.0)	12 (46.2)	4 (20.0)	12 (46.0)	4 (20.0)	12 (46.2)	4 (20.0)	12 (46.0)	4 (20.0)
知っておられますか												
知っておられる でしょうか												
知っていらっし ゃいますか	1 (3.8)	5 (25.0)	1 (3.8)	6 (30.0)	1 (3.8)	5 (25.0)	1 (3.8)	5 (25.0)	1 (3.8)	5 (25.0)	1 (3.8)	5 (25.0)
知らない												
知りませんか		1 (5.0)				1 (5.0)		1 (5.0)		1 (5.0)		1 (5.0)
知りませんでしたか				1 (5.0)								
知り申しあげて ますか												
お知り申しあげ てますか												
ご存知ですか												1 (5.0)
ご存知でしょうか	10 (38.5)	8 (40.0)	9 (34.6)	7 (35.0)	10 (38.5)	9 (45.0)	9 (34.6)	9 (45.0)	10 (38.5)	9 (45.0)	10 (38.5)	7 (35.0)
ご存知ないです か	2 (7.7)	2 (10.0)	2 (7.7)	1 (5.0)	2 (7.7)	1 (5.0)	2 (7.7)	1 (5.0)	2 (7.7)	1 (5.0)	2 (7.7)	1 (5.0)
ご～されてます か												
お～になりました たでしょうか												
どうですか												
いかがでしょう か												
省 略	1 (3.8)		1 (3.8)		1 (3.8)		2 (7.7)		1 (3.8)		1 (3.8)	1 (5.0)
+ 待 遇	25 (96.2)	20 (100)	25 (96.2)	20 (100)	25 (96.2)	20 (100)	24 (92.3)	20 (100)	25 (96.2)	20 (100)	25 (96.2)	19 (95.0)
± 待 遇	1 (3.8)		1 (3.8)		1 (3.8)		2 (7.7)		1 (3.8)		1 (3.8)	1 (5.0)
計 (%)	26 (100)	20 (100)	26 (100)	20 (100)	26 (100)	20 (100)	26 (100)	20 (100)	26 (100)	20 (100)	26 (100)	20 (100)

話題主による聞き手に対する敬語使用の傾向(4)

表現形式	話題主		後 輩		同級生		院 生		助 手		B教授		学 長	
	聞き手	話し手	院 生											
			男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
知ってる														
知ってるか														
知ってるかい														
知ってるかな														
知っててたよね														
知ってただろう														
知ってたでしょう														
知ってます														
知ってますか														
知っておられますか		2 (7.7)	1 (5.0)	2 (7.7)		2 (7.7)		3 (11.5)		3 (11.5)		2 (7.7)	1 (5.0)	
知っておられる でしょうか		1 (3.8)								1 (3.8)	1 (5.0)	1 (3.8)		
知っていらっし ゃいますか		2 (7.7)	4 (20.0)	2 (7.7)	5 (25.0)	2 (7.7)	4 (20.0)	2 (7.7)	5 (25.0)	2 (7.7)	4 (20.0)	2 (7.7)	3 (15.0)	
知らない														
知りませんか														
知りませんでしたか														
知り申しあげて ますか														
お知り申しあげ てますか														
ご存知ですか														
ご存知でしょう か		16 (61.5)	12 (60.0)	18 (69.2)	12 (60.0)	16 (61.5)	14 (70.0)	15 (57.7)	12 (60.0)	15 (57.7)	13 (65.0)	16 (61.5)	14 (70.0)	
ご存知ないです か		2 (7.7)	1 (5.0)	3 (11.5)	2 (10.0)	3 (11.5)	1 (5.0)	3 (11.5)	1 (5.0)	3 (11.5)	1 (5.0)	3 (11.5)	1 (5.0)	
ご～されてます か			1 (5.0)			1 (3.8)			1 (5.0)					
お～になりました でしょうか								1 (3.8)						
どうですか		1 (3.8)	1 (5.0)	1 (3.8)	1 (5.0)		1 (5.0)	1 (3.8)	1 (5.0)		1 (5.0)		1 (5.0)	
いかがでしょう か												1 (3.8)		
省 略		2 (7.7)				1 (3.8)		1 (3.8)		2 (7.7)		1 (3.8)		
+ 待 遇		24 (92.3)	20 (100)	26 (100)	20 (100)	25 (96.2)	20 (100)	25 (96.2)	20 (100)	24 (92.3)	20 (100)	25 (96.2)	20 (100)	
± 待 遇		2 (7.7)				1 (3.8)		1 (3.8)		2 (7.7)		1 (3.8)		
計 (%)		26 (100)	20 (100)	26 (100)	20 (100)	26 (100)	20 (100)	26 (100)	20 (100)	26 (100)	20 (100)	26 (100)	20 (100)	

主に対する敬語使用の場合と同じく一般的に男子大学生の方は「～ます (か)」「～られます (か)」の表現をよく用いているのに対して女子の方は「～ていらっしゃいます (か)」という表現を多く用いている。

以上で話題主に対する敬語使用を聞き手との関係でそして、聞き手に対する敬語使用を話題主との関係でそれぞれに対して用いられた敬語表現を中心に分析考察してきた。その結果、話題主に対して最も多く用いられている敬語表現を話題主の上下関係との対応から見ると次のような結果が得られた。

第一段階のものが「～れる」「～ておる」で聞き手がどのような場合でも最も一般的にすべての話題主の待遇にもちいられている。

第2段階は、「～ておられる」「～ていらっしゃる」は話題主が上位になるほどこの表現の使用が増えている。「～ておられる」は男子の方が、「～ていらっしゃる」は女子の方がその使用が多い。男子は最も下位待遇している同級生に対しては「～ていらっしゃる」を全く用いていないことなどから「～ておられる」より「～ていらっしゃる」を丁寧度が高い表現として意識していることが分かる。

第3段階は「お～になる (なられる)」は聞き手が上位である「院生」と「A教授」の場合の上位話題主の待遇に主に用いられている。

次に聞き手に対する敬語表現をみると

第1段階は「知ってる」「知ってるか」を後輩と同級生が聞き手である場面において

第2段階は「知ってますか」を男子は院生に、女子は後輩と院生に対して多く用いる。

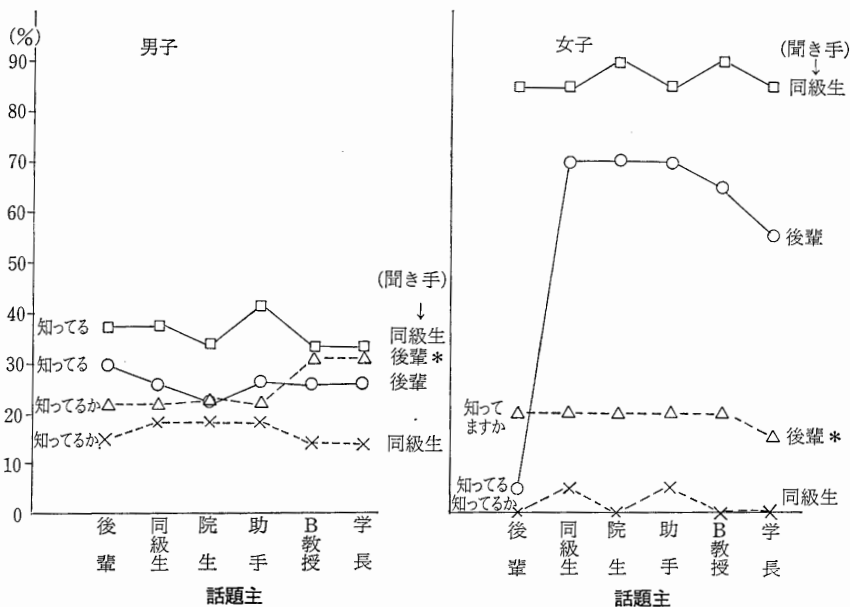
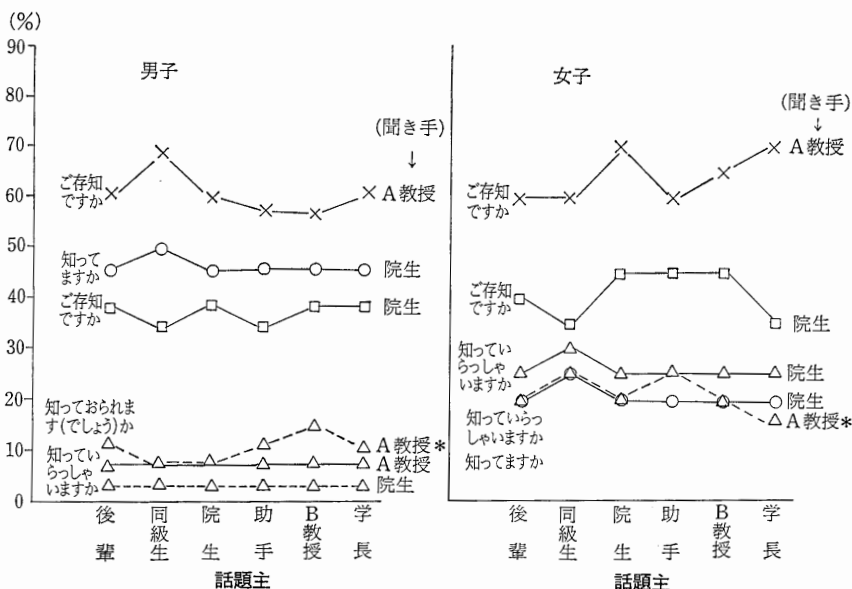
第3段階は「知っておられますか」「知っていらっしゃいますか」

第4段階、「ご存じです (でしょう) か」は最も上位待遇をする場合に用いられている。

なお、話題主と聞き手それぞれの場合に対して上下関係に応じて用いられている敬語表現をその使用分布から筆者は丁寧さという観点から整理し、敬語表現の丁寧さの「段階」と呼んでいる。この敬語表現の丁寧さの段階を決めるのは非常に難しく、何をもって丁寧さの程度を決める基準とするかについてはあまり議論がなされていないで研究者の主観的判断にまかされてきたように思われる。しかし、最近荻野綱男 (1984) はこのような問題すなわち敬語表現における丁寧さを決定する要素と丁寧さの程度を数量的に明らかにする研究を行っており一つの基準を提供しているが (注13)、まだこの問題に関しては未解決の課題が大きく残されているように思われ、筆者もこの問題に取り組んでいるところである。

以上、現代日本語の敬語法における「話題主」と「聞き手」の相関関係を質問紙の調査によって得られた敬語表現形式を中心に分析し考察してみた。その結果、話題主に対する敬語使用には聞き手の地位の上下関係が強くしかも段階的に関与しているということが具体的に見らかになったが、このような敬語使用の結果はどのような敬語意識に基づいているのかに関するアンケート調査の結果と照らし合わせて分析してみたい。

表に表わした敬語表現の中で最も多く用いられている敬語表現をグラフに表わしてみると次のようになる。



グラフ 3 聞き手に対する敬語表現の使用傾向



### 4.3 敬語使用の規定要因の相対的重要度

敬語使用を規定するとされている「年齢」「地位」「うちそと」「性別」の4要因の相対的重要度を調べるために先の質問紙で（附録の質問紙を参照）で 1. 話題主, 2. 聞き手, 3. 話し手・話題主・聞き手の三者間の関係の三つの場合のそれぞれに対して調査してみたが, その結果を見てみよう。表3が話題主に対する場合, 表4が聞き手に関する場合である。

表3は, 敬語使用を規定するとされる4要因を話題主についてみた場合, 話し手がどのように意識しているかその意識の強さを表わしているものである。その結果を見てみると男子大学生の場合には「年齢」を最も強く意識しており女子大学生の場合は「地位」を最も強く意識している。その次が男子は「うちそと」を, 女子は「年齢」を意識している。敬語使用の場合, 諸題主の属性として男子大学生が年齢を重要視しているのに対し女子大学生は地位かうちそとを重要視し年齢をあまり考慮しないということは, 女性の言葉遣いが親疎関係に基づいて丁寧であったりそうでなかったりするとの多いこととも一致している。マーティン (1964) は, 被調査者の男女を区分していないが, 本調査の男女を合わせた平均値の結果と比較してみると, 「うちそと」と「性別」の順番だけが異なっている。しかし, 本調査では, 話題主に対する敬語使用に「性別」よりは「うちそと」の要因がもっと影響していることが示されている。

表 3 話題主に対する敬語使用の規定要因の優先順位

性別 \ 順位	敬 語 使 用 の 規 定 要 因			
	1 位	2 位	3 位	4 位
男 子 26 人 (100 %)	年 齢 11 人 (42.2%)	うちそと 8 人 (33.3%)	地 位 7 人 (26.9%)	性 別 0 人 (0 %)
女 子 20 人 (100 %)	地 位 12 人 (60.0%)	うちそと 4 人 (20.0%)	年 齢 3 人 (15.0%)	性 別 1 人 (5 %)
合 計 46 人 (100 %)	地 位 33 人 (53.5%)	年 齢 12 人 (28.6%)	うちそと 10 人 (26.6%)	性 別 1 人 (2.5%)
Martin, Samuel E	地 位	年 齢	性 別	うちそと

被験者：男子 26 名, 女子 20 名

次に表4の聞き手に対する敬語使用の規定要因の優先順位を見てみよう。表を見ると分かるようにその優先順位の傾向は話題主に対する場合とはほぼ変わらないものの年齢がさらに重要視されている。男女全体としては「年齢」「地位」「うちそと」の順になっており, マーティンの「うちそと」「地位」「年齢」という調査結果とは異なっている。「うちそと」を重要視しているマーティンの調査結果は一般社会における敬語使用の傾向を表わすもので相対敬語の特徴をそのまま表わしていると思われる。それに対して大学生が「うちそ

表 4 聞き手に対する敬語使用の規定要因の優先順位

性別 \ 順位	敬 語 使 用 の 規 定 要 因			
	1 位	2 位	3 位	4 位
男 子 26 人 (100 %)	年 齢 13 人 (50%)	うちそと 7 人 (26%)	地 位 5 人 (19.5%)	性 別 1 人 (3.8%)
女 子 20 人 (100 %)	地 位 10 人 (50%)	年 齢 6 人 (30%)	うちそと 3 人 (15.0%)	性 別 1 人 (5 %)
合 計 46 人 (100 %)	年 齢 23 0 (40%)	地 位 13 人 (34.6%)	うちそと 8 人 (20.95%)	性 別 2 人 (4 %)
Martin. Samuel E	うちそと	地 位	年 齢	性 別

被験者：男子 26 名，女子 20 名

表 5 三者間（話し手・話題主・聞き手）の関係の意識の順位

性別 \ 順位	意 識 の 優 先 関 係			
	1 位	2 位	3 位	4 位
男 子 26 人 (100 %)	話し手と聞き手の関係 16 人 (61.5%)	話し手と話題主の関係 5 人 (19.2%)	話題主と聞き手の関係 4 人 (15.4%)	そ の 他 1 人 (3.9%)
女 子 20 人 (100 %)	話し手と聞き手の関係 11 人 (55.0%)	話題主と聞き手の関係 6 人 (30.0%)	話し手と話題主の関係 3 人 (15.0%)	
合 計 46 人 (100 %)	話し手と聞き手の関係 27 人 (58.3%)	話題主と聞き手の関係 11 人 (22.7%)	話し手と話題主の関係 7 人 (17.1%)	そ の 他 1 人 (1.9%)

被験者：男子 26 名，女子 20 名

と」より「年齢」や「地位」をより強く意識し重要視するとしているのは，大学生の敬語使用においては完全に相対化した敬語使用意識よりある程度絶対敬語的性格をもった敬語意識が働いているからであるように思われる。

最後に，それでは敬語使用において話し手，話題主，聞き手の三者間の関係はどの組み合わせの関係が強く意識されうるものであろうか，表 5 の調査結果を見てみよう。

表 5 で分かるように敬語使用においては，「話し手と聞き手の関係」が支配的な影響力を持っていることがよく表れている。男女大学生を合わせた平均値として，「話し手と聞き手の関係」を強く意識する人の割合が全体の 5.3% で最も多く，次に「話題主と聞き手

の関係」が22.87%となっており、「話し手と話題主の関係」は17.1%程度に過ぎない。如何にも現代日本語の敬語法において「聞き手」の存在は重要で強く働く要因であるかを表わしているように思われる。これに対して韓国人大学生についての筆者の調査で（未発表）<sup>(注14)</sup> 日本人大学生の場合と似たような結果が出ており、韓国語の敬語の相対化の傾向を示している一事例であるように思われる。相対敬語の「聞き手中心性」が改めて裏付けられた結果である。

## 5. 結論と今後の課題

以上、本研究では話し手、話題主、聞き手の三者間の関係をその地位の上下関係に基づき同時に想定し、1. 聞き手における地位の上下関係が話題主に対する話し手の敬語使用にどのように影響を及ぼしているか、2. 話題主における地位の上下関係が聞き手に対する話し手の敬語使用にどのように影響を及ぼしているのか、の二点を話題主と聞きそれぞれに対して用いられた敬語表現形式の分析を通して行ってきた。その結果本研究では次のようなことが明らかになった。

1) 話し手による話題主の待遇には、同じ話題主であっても聞き手の変化によってその話題主に対する＋待遇、土待遇の程度が段階的に変化していることから、聞き手の地位が話題主の待遇に大きく関与し影響を及ぼしていることが実証された。

2) 話題主の地位の上下関係は聞き手への待遇にはほとんど関与しないようである。話題主を変えても聞き手に対する＋待遇、土待遇の程度がほぼ一定であることがそれを物語る。話題主が介入してくる場合でも聞き手に対する待遇はほとんど聞き手それだけの属性で決まるようである。

さらに、敬語意識に関するアンケート調査の戦果も聞き手が話し手の敬語使用に最も支配的な影響力を及ぼしていることを表示している。

以上のような結果から現代日本語の敬語法における「聞き手中心性」が改めて実証的に検証されたが、この「聞き手中心性」に基づく敬語使用は、話題主に対する尊敬語、謙譲語などいわゆる素材敬語の衰退、丁寧語の優勢、尊敬・謙譲語の丁寧語的あるいは美化語の使用などの方向へ導いているように思われる。敬語の機能の変化とその原因をここに見いだすことができよう。

今後の課題としては、「聞き手中心性」が話題主の待遇に及ぼす影響の程度などを日・韓比較し、明らかにしていきたい。さらに、敬語表現の丁寧さの段階の問題も客観的基準を追求していきたいと思っている。

(注)

- 1) 井上史雄 (1981)「敬語の地理学」『国文学 敬語の手帳』第26巻2号 學燈社 47頁。
- 2) 「聞き手中心性」ということばを直接用いているのは大石初太郎 (1983) が『現代敬語研究』においてであるが、渡辺 実の他現代敬語法における聞き手の重要性を強く説いた研究者は多い。
- 3) 三上 章 (1972)『現代語法新説』くろしお出版, 195頁。
- 4) 芳賀 純 (1981)「敬語の心理学」『国文学 敬語の手帳』第26巻2号 學燈社, 25頁。

- 5) 渡辺 実(1971)『国語構文論』, 稿書房, 433 頁。
- 6) 井上史雄(1972)「第三者への敬語」『国語学』90 国語学会 79 頁。
- 7) 荻野綱男(1987)「第三者に対する敬語の丁寧さの構造——クロス集計の数量化による分析」『計量国語学と日本語処理』水谷静夫教授還暦記念会編, 秋山書店。
- 8) 井上史雄(1972)「第三者への敬語」『国語学』90 国語学会。
- 9) マーティン (Martin, S.E., 1964) “Speech Levels in Japan and Korea” in D. Hymes (ed.). *Language in Culture and Society*. Harper and Row.
- 10) 敬語研究において敬語使用という観点からは一般的に敬語が用いられている場合を敬語使用, そうでない場合を敬語非使用ということばで表わすことが多い。この外には敬語使用の場合を+レベル、そうでない場合を0レベル(井出祥子他 1983)というふうに区別している研究も見られる。一方, 語の次元における考えとして敬語とそうでないことばを区別し非敬語あるいはマイナス敬語というふうに呼んでいる場合もあれば(南 不二男 1987), 辻村敏樹(1976)のように時枝の敬語——通常語——卑罵語の対応を 敬語的にプラスかマイナスかゼロかというふうに考える研究者もいる。本研究では, 井出と辻村の考えを折衷し+待遇, ±待遇, 一待遇ということばを用いているが, これは敬語を使用するかしないかという言語行動の側面と言語表現それ自体すなわち両方を指し示すことばとして用いているものである。
- 11) 井上史雄(1983)「社会構造の変化と敬語の将来」『日本語学』第二巻第一号, 明治書院, 18 頁。
- 12) 鄭 恵卿(1989)「現代日本語の敬語における丁寧さの研究」筑波大学大学院, 文芸・言語研究科, 博士号請求論文(準備中)において詳しく述べている。
- 13) 荻野綱男(1984)「敬語の丁寧さを決定するもの」『数理科学』No. 258, サイエンス社。
- 14) 鄭 恵卿(1989)「現代日本語の敬語における丁寧さの研究」筑波大学大学院, 文芸・言語研究科, 博士号請求論文(準備中)。

#### 参考文献

- 井出祥子・生田少子(1983)「社会言語学における談話研究」『月刊言』Vol. 12, No. 12, 語大修館書店。
- 井上史雄(1972)「第三者への敬語」『国語学』90, 国語学会。
- 井上史雄(1981)「敬語の地理学」『国文学 敬語の手帳』第 26 巻 2 号, 學燈社。
- 井上史雄(1983)「社会構造の変化と敬語の将来」『日本語学』第二巻第一号, 明治書院。
- 大石初太郎(1983)『現代敬語研究』筑摩書房。
- 荻野綱男(1984)「敬語の丁寧さを決定するもの」『数理科学』No. 258, サイエンス社。
- 荻野綱男(1987)「第三者に対する敬語の丁寧さの構造——クロス集計の数量化による分析」『計量国語学と日本語処理』水谷静夫教授還暦記念会編, 秋山書店。
- 金田一京助(1942)「女性語と敬語」『国語研究』八雲書林。
- 国立国語研究所(1983)『敬語と敬語意識——岡崎における 20 年前との比較』三省堂。
- 鄭 恵卿(1987)「日本語の待遇表現に関する一研究, 特に話題主の取扱いを中心に」, 筑波大学国語国文学会第十一回大会口頭発表原稿。
- 辻村敏樹(1976)「敬語と非敬語」『論集日本語研究』北原保雄編, 有精堂。
- 芳賀 純(1981)「敬語の心理学」『国文学—敬語の手帳』第 26 巻 2 号, 學燈社。
- Martin, S.E. (1964) “Speech Levels in Japan and Korea” in D. Hymes (ed.). *Language in Culture and Society*. Harper and Row.

三上 章(1972)『現代語法新説』くろしお出版。

南 不二男(1987)『敬語』岩波書店。

渡辺 実(1971)『国語構文論』塙書房。

## 附 録 (質問紙)

### ことばの調査

文芸・言語研究科 言語学専攻 鄭 恵卿

この調査は、日常生活におけることばの使用に関するものです。次のような場面であなとはどのように話しますか。なるべく自然な話し方そのままを質問の下線のところに書いて下さい。

場面：あなたはこれから論文(卒論)を書くことになっており、そのことでA教授の研究室で助言を受けているところです。話の途中、あなたがA教授に“Xがその論文を学会誌に書いていたが知っているか”という内容のことを尋ねる場面です。この場面で話し手はあなた、聞き手はA教授です。あなたとA教授の関係親密の程度はどちらかと言うと中立的間柄だとします。あなたの話の中に出てくる話題の人物Xは、各質問の中で示してあります。なお、各質問の中では場所、聞き手、話題など場面が色々変わりますが、その時その時のあなたにとって最も自然な話し方を書いて下さい。

問 1. “鈴木(あなたの同級生)が学校新聞にその事を書いているが知っているか”という内容のことをあなたはA教授にどのように尋ねますか。

話し方： \_\_\_\_\_

⋮

### 以下省略

あなたが日常生活でふだん話をする時に意識する、あるいは気にすることは次のなかのどのことですか。あなたにとって意識する度合いの強いものから順に番号をつけて下さい。

- 1) 聞き手の 年齢( ) 地位( ) 性( ) うち一そと( )
- 2) 話題の人物の 年齢( ) 地位( ) 性( ) うち一そと
- 3) 話し手と話題の人物との関係( ) 話し手と聞き手との関係( )  
話題の人物と聞き手との関係( )

## 付 記

本稿は、1987年9月19日「筑波大学国語国文学会第11回大会」において筆者が口頭発表した際の原稿をもとに全面的に書き改めたものであります。本稿の作成に当たっては筑波大学文芸・言語学系の芳賀 純教授の御指導、御助言をいただきました。また、口頭発表の際には同大学文芸・言語学系の北原保雄教授をはじめ、大石初太郎先生その他多くの方々には有益な御助言をいただきました。ここに記して心からお礼申し上げます。しかしながら、言うまでもなく、本稿の責任の所在は筆者にあります。

(筑波大学博士課程 文芸・言語研究科 応用言語学)